

韓国・朝鮮に於けるナショナリズムの復興と近代文学の成立

李, 建志
県立広島大学

<https://doi.org/10.15017/2202961>

出版情報：韓国研究センター年報. 8, pp.60-62, 2008-03-28. Research Center for Korean Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



韓国・朝鮮に於けるナショナリズムの 興隆と近代文学の成立

県立広島大学 李建志

研究の概要

韓国の「国文学」研究の世界では、近代文学は李氏朝鮮時代後期からの内在的な発展の結果ととらえられており、それが日本植民地統治によって妨害されたとされる。これは、日本によって近代化されたという「移植文学論」への抵抗として、解放後の韓国で論じられてきたものであり、相当な正統性が与えられてきた議論であった。これは趙演鉉の新小説研究に始まり、金允植、崔元植、そして最近の金榮敏などといった研究者によって深められている。

もちろん、近代化とは内在的な力なしになしえるものではないものであり、そういった意味でこれらの議論は正しい。また、日本によって近代が植え付けられたというのは、朝鮮に内在的な発展の要素がなかったという議論であり、たった数十年でそれが達成されたとするのは無理があるだろう。

しかし、この議論をそのまま受け入れるのには若干抵抗がある。なぜならば、韓国では（少なくとも筆者の感覚からすると）激しいナショナリズムが渦巻いており、このナショナリズムという「思想」は、他者とのぶつかり合いのなかで徐々に形成されていくものであると考えるからだ。すなわち、たしかに近代化そのものを日本によってもたらされたというのは間違った考え方だろうし、また朝鮮半島の近代文学が日本の近代文学の概念の「移植」であったとするのは許容できないが、ナショナリズムは日本という異民族統治によって刺激され、内面化させられたものなのではないか、そしてこの内面化の契機がなければ、その近代ナショナリズムが反転して表出するプロセス（近代的自我の表出）はありえなかつただろうと考えるのだ。

ナショナリズムとはすぐれて歴史的な概念であって、近代的な思考が一般化するなかで広がっていくものである。そして、この「思想」は排他性によって担保される特質がある。すなわち純粋な韓国人ではない何かを指摘し、排除することが、ナショナリズムを維持する方法となるわけだ。これは日本をはじめとした外圧によって、はじめて目覚めたものだといっている。朝鮮時代以前の朝鮮半島は、たしかに中国の冊邦体制にあった。だが、これは近代的な植民地とはまったく違う、皇帝と王による関係に過ぎない。ひとつの国が他の国・地域をまるまる支配する植民地の体制とは異なる。当然ひとびとは、異民族統治を目の当たりにし、彼らではない「われわれ」とは何かが問われることになる。これが「内面化」だとすれば、それが反転して表出される過程を経て、はじめて近代的な自我が、（ナショナリズムという外衣をまとって）登場するといっている。朝鮮ではこれが1919年の万歳運動だったのだろうと考える。その時期を前後して朝鮮最初の近代文学とされる李光洙の『無情』、最初の国文学史である安自山の『朝鮮文学史』が書かれたのは、偶然ではないのだ。

だが、これらの動きは植民地体制の強化（「文化統治」から「内鮮一体」へ）により、伏流水としてのみ存在することとなる。解放後、韓国での文化的ナショナリズムはこのような前史をもって誕生したといっている。もちろん、だから韓国のナショナリズム、そしてその中にある排他性を批判しなくていいというわけにはいかないが、少なくともこのような前史をおさえることは重要だと考えるのだ。

研究の成果

これらの研究は本年9月に出版された『朝鮮近代文学と「権力」～抵抗のナショナリズム批判』（作品社）に発展的に論じられている。主に解放以後の韓国でナショナリズムがいかんにして創られていったかが論点のひとつとなっている。さらに、日本でのナショナリズム批判とともに、そのナショナリズム批判のなかにひそむ構造、すなわち日本の良心的知識人にありがちな「無意識の善意」の問題点（実際問題として「在日朝鮮人」などのマイノリティに仮託して日本ナショナリズムを批判するかたちになっているということなど）を問いたすものともなっている。現代日本には所得格差の問題や伝染病に対する差別問題など、さまざまな矛盾が潜んでいるのであり、わざわざマイノリティを取り上げなくても、日本批判をすることは十分に可能であることを考えると、良心的知識人が行っている「在日朝鮮人」への期待は一面では評価できても、全面的には肯定できない。さらには、その日本の良心的知識人が救済してしまっている「在日朝鮮人」のナショナリズムや、韓国本国のナショナリズムは、韓国内のマイノリティへの抑圧として機能している以上、間接的な差別の肯定、参加という側面さえ持っているのである。

韓国社会が差別するマイノリティの具体的な例として、本書では在韓華僑の来歴と彼らのイメージが韓国でどのように創られてきたかを取り上げてもある。もちろん、日本の知識人として韓国のナショナリズムへの直接的な批判は憚られるという意識もあるのだろうが、現実問題としてその躊躇が韓国内でのマイノリティ差別を助長するかたちになっていることに気がついてほしいと思う。本論では、その上で在韓華僑が描かれる韓国映画の作品を分析し、韓国社会が在韓華僑を見る視線をあばく。そこからは、在韓華僑を描き出す韓国マジョリティの不可能性と可能性が見えてくるだろう。

『朝鮮近代文学と「権力」～抵抗のナショナリズム批判』

序章 「「反権力」にも「権力」は宿る」

1章 「梁石日の読まれ方―「在日朝鮮人文学」という「外地」」

2章 「母語と祖母語のあいだにあるもの―李恢成、金城哲夫、鳩沢佐美夫」

3章 「総動員体制下の朝鮮における支配言語と母語―崔載瑞をつうじて」

4章 「韓国「建国理念」の文学的展開―「南韓」文壇統一と金東里」

5章 「「民族文学史」に対する覚書」

6章 「在韓華僑物語―その起源と文化表象」

これからの研究方向

繰り返しになるが、ナショナリズム批判という位置でものを考えるとき、日本ナショナリズムと向き合うだけで韓国ナショナリズム批判を怠る向きが多い。しかし、もしも（例えば「在日朝鮮人」と他称されるエスニック・グループに出自を持つものが）そのような態度でナショナリズム批判をするならば、それは間接的に韓国でのマイノリティ差別（在韓華僑差別や中国朝鮮族を含む外国人労働者差別）に加担してしまうことになる。このような愚を犯さないためにも、日本と韓国ナショナリズムに対する厳しい批判者として、文学研究を続けていきたいと考えている。

またその延長として、民族（主義）という観点から見て正しかったか、間違っていたかという固定的、記号的な解釈から自由になり、植民地期を含めたさまざまな文学および思想の可能性と不可能性を論じていく予定である。

補

書籍出版後に、読者から様々な意見がもたらされた。そのなかで、波瀾剛氏は筆者の知らなかった先行研究文献を知らせてくれた。この場をかりて感謝したい。

第二章の第一節に李恢成を論じている場面があるが、取り上げた小説は「夏の学校」という初期の習作であった。これについて金貞愛氏が論文を発表していた。先行研究として書き漏らしたのでここに記す。

金貞愛「戦後の<光の中に> -李恢成「夏の学校」論」、筑波大学文化評研究会編『<翻訳>の圏域-文化・植民地・アイデンティティ』、2004年2月。

